

暮らしを支えた石器

縄文人が生きていくうえで最も大切なことは、日々の食料獲得でした。そのための狩猟・漁撈・採集には様々な石器が用いられ、なかでも縄文時代を特徴づける3種類の石器があります。

①石鏃



大草遺跡
(土岐市)

矢の先端に付ける石器です。弓矢は投げ槍に比べ、動きの早い小型動物を仕留めるのに適しています。狩猟には落とし穴や猟犬も使われたと考えられます。

②石皿と磨石・敲石



宮之脇遺跡
(可児市)

ドングリ類やクズ・ワラビといった根茎類をすりつぶして製粉するための道具です。植物質食料の利用が増える中期に出土量が増加する石器です。

③打製石斧



上山遺跡
(多治見市)

木製の柄を取り付けて使用する土堀り具です。とくに根茎類を掘り出すのに活躍したと考えられ、石皿・磨石とともに中期に出土量が増加します。

縄文人の心が垣間見える道具

縄文時代には、儀礼や信仰にかかわるとみられる道具や装身具も多く作られました。

土偶

女性を表現した小像です。用途ははっきりしていませんが、体のどこかが欠けているものが多く、完全な形で出土することはまれです。



早期 砂取遺跡
(土岐市)

中期 宮之脇遺跡
(可児市)

後期 中村遺跡
(中津川市)

石棒・石刀・石剣

男性のシンボルを石でかたどったと考えられ、中期に大型だった石棒はしだいに小型化し、後期・晩期には刀や剣のような形状に変化します。



石刀 後・晩期 北裏遺跡 (可児市)

装身具



石製垂飾
前期 落合五郎遺跡
(中津川市)

石製垂飾
中期 大草遺跡 (土岐市)

化石のアクセサリー？



ビカリエラの化石
白山神社遺跡 (多治見市)

乳白色の美しい巻貝の化石が前期の遺跡から出土しています。縄文人が装身具にしたと考えられます。

【注】
縄文時代各時期の絶対年代については、近年、科学的な手法による研究が盛んになっていますが、いまだ様々な議論があります。本展では、ひとつの目安として提示しました。

【主要参考文献】
小林達雄・小川忠博 1988～89 『縄文土器大観』 1～4 小学館
小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
勅使河原彰 2016 『縄文時代史』 新泉社
土岐市立曾木小学校 1976 『郷土誌本・曾木』
戸沢充則 編 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版
橋口尚武 1999 『海を渡った縄文人―縄文時代の交流と交易』 小学館
※このほか、各遺跡の発掘調査報告書

【協力機関】
可児市、多治見市教育委員会、
中津川市教育委員会、瑞浪市陶磁資料館

東美濃の縄文土器

— 東と西の文化が会う場所 —

2019 5.31 国 → 9.8 国



土岐市美濃陶磁歴史館

TOKI CITY HISTORICAL MUSEUM OF MINO CERAMICS
〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻1263番地
TEL.0572-55-1245 FAX.0572-55-1246

発行 公益財団法人土岐市文化振興事業団 (編集:春日美海)



東美濃の縄文土器

— 東と西の文化が会う場所 —

土器の出現と縄文時代の始まり

日本列島に土器が出現した時期 (14,000 年前頃) をもって、縄文時代の始まりとされています。それ以前の旧石器時代にはなかった煮炊き用の道具「土器」の出現により、人々の暮らしに大きな変革がもたらされました。土器によってドングリ類や根茎類など加熱調理が必要な植物が食用にできるようになり、食材の幅が格段に広がりました。気候変動による動植物相の変化にも適応し、人々は日本列島全体で安定的な定住生活を営むようになり、縄文時代は 1 万年間以上にわたって続いていきました。そして、その間に時期や地域ごとに特色をもった多彩な縄文土器が生み出されました。

【土器の出現と縄文時代の始まりまでの流れ】

		日本列島の気候と動植物		日本列島の人々と道具	
更新世	70,000 年前	寒冷期	旧石器時代	最終寒冷期 北半球で氷河が発達し、海水面が低下 →日本列島は大陸と地続きに。 →マンモス、ナウマンゾウ、オオツノジカといった哺乳動物が日本列島へ渡ってくる。 植生は主に針葉樹林帯	4 万年前頃、動物を追って新人が大陸から日本列島へ渡ってくる。 =後期旧石器時代 =石器を使用する狩猟採集生活
	14,500 年前	温暖期	縄文時代草創期	温暖化により海水面が上昇 →日本列島は大陸から離れ、島国となる。 →大陸から渡ってきた動物たちが日本列島に取り残される。 (気候は寒暖を繰り返しながら温暖期へ向かう) →急激な気候変動に対応できなかった大型動物が絶滅。ニホンジカやイノシシなどの中・小型哺乳動物が生息域を拡大。	～縄文土器の誕生～ 日本列島に土器が出現 →食材の煮炊きが可能になる (食材の種類が豊富になる)
	12,500 年前	寒冷期	縄文時代草創期	狩猟道具は、槍から弓矢の時代へ 大型動物を槍で仕留める方法から、シカやイノシシを弓矢で仕留める狩猟へ	肉も木の実も山菜も、土器と一緒に煮込めるよ!
	11,500 年前	温暖期	縄文時代早期	日本列島の植生が変化 →照葉樹林と落葉広葉樹林に覆われ、ドングリ類 (堅果類) が豊富になる。 →ドングリ類は栄養価が高く、保存がきくため、縄文時代の人々の主要な食糧となる。 ただし、加熱調理やアク抜きが必要。	弓矢は画期的な飛び道具。飛距離、命中度ともに抜群!
完新世				縄文土器が大量に生産され、ドングリ類の加熱調理やアク抜きなどのほか、様々な用途に使用されるようになる。 →日本列島に集落が広がり、安定した定住生活が営まれる時代へ ～2,500 年前頃まで	土器の出番です!

縄文時代 はじまり

14,000
年前頃

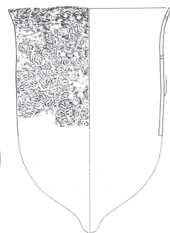


有舌尖頭器
堂上平遺跡・西ヶ洞遺跡
(土岐市)

11,500
年前頃



押型文土器の破片
落合五郎遺跡 (中津川市)



尖底深鉢形土器の美測図
(関市教育委員会 1989『塚原遺跡・
塚原古墳群』発掘調査報告書より転載)

7,500
年前頃

深鉢形土器
落合五郎遺跡 (中津川市)



有孔鐳付土器
落合五郎遺跡 (中津川市)

5,500
年前頃



深鉢形土器
阿曾田遺跡 (中津川市)



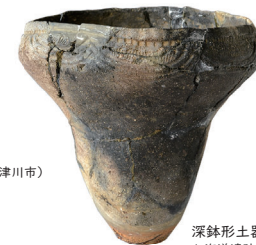
深鉢形土器
阿曾田遺跡 (中津川市)



深鉢形土器
阿曾田遺跡 (中津川市)



鉢形土器
妻木平遺跡 (土岐市)



深鉢形土器
入海道遺跡 (土岐市)



深鉢形土器
宮之脇遺跡 (可見市)



深鉢形土器
宮之脇遺跡 (可見市)



有孔鐳付土器
宮之脇遺跡 (可見市)



深鉢形土器
宮之脇遺跡 (可見市)

台付深鉢形土器
宮之脇遺跡 (可見市)



深鉢形土器
宮之脇遺跡 (可見市)

4,500
年前頃



深鉢形土器
久須田遺跡 (中津川市)



注口土器
久須田遺跡 (中津川市)

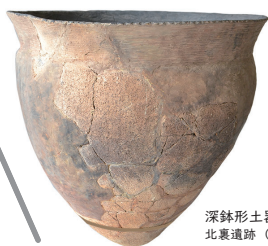


深鉢形土器
久須田遺跡 (中津川市)

3,000
年前頃



壺形土器
北裏遺跡 (可見市)



深鉢形土器
北裏遺跡 (可見市)

晩期

縄文時代の終末期です。東北地方に分布の中心をもつ「亀ヶ岡式土器」が近畿地方まで広域に分布し、それとは逆方向で西日本系の土器が東へ伝わりました。東西日本の接点・東美濃では、亀ヶ岡式の影響を受けた土器、西日本系の土器、東海地方の土器がひとつの遺跡から出土します。



亀ヶ岡式の土偶 (遮光器土偶)
亀ヶ岡出土 (青森県)
東京国立博物館デジタル

2,500
年前頃

縄文時代 おわり

弥生時代

旧石器時代

草創期

草創期の遺跡は、本州から九州までに点在しています。今のところ、東美濃地方で草創期の土器はみつかっていませんが、草創期に特徴的な石器「有舌尖頭器」が採集されていることから、この地方でも土器の使用が始まっていたと考えられます。

早期

本確的な定住生活の開始期です。土器の器形は基本的に深鉢形のみで、底は尖底か丸底です。中部地方から西日本では、彫刻を加えた丸い棒を回転させて器面全体に文様を施す「押型文」が流行します。

前期

前期初頭にもっとも温暖化が進み、海水面が上昇して内陸に海岸線が入り込めます(縄文海進)。各地で貝塚が多く形成され、とくに東日本で遺跡数が増加し、縄文文化が発展する時期です。土器は、深鉢形に加えて浅鉢や台付鉢、有孔鐳付など器種が豊富になります。

中期

東日本に大規模集落が広がる時期で、東美濃地方でも木曾川とその支流域で集落が発達します。中期は、北陸地方の火炎土器のような装飾と造形力に富んだ土器が産み出される時期です。東美濃では東西日本、北陸、東海など各方面の影響を受けた多様な土器が出土します。東美濃の中でも東部では信州方面からの影響が強みられるなど、地域差があります。

後期

気候の寒冷化が進む時期で、縄文文化は成熟期を迎えます。東日本では「磨消縄文」とよばれる技法で、縄目を付けた器面に文様を彫り込み、ピカピカになるまで研磨し黒色に焼き上げた土器が流行し、東美濃でも出土します。また、注口土器という器種も後期に登場しました。